

第十回講義へのコメント

子供にリンゴを渡し、「これはリンゴだ」と教えると、次にリンゴを渡されたその子供はそれをリンゴとして捉える。最初に渡したリンゴと次に渡したリンゴは全く同じものではない。それでも子供はそれをきちんとリンゴと理解できる。つまり、人間は子供であっても、個物ではなく概念を理解する。正確には違うのに 2 回目のリンゴをリンゴと理解できたのは、リンゴを個物として認識しているのではなく、「リンゴ」という概念として理解しているからなのだ。そして、ある概念を把握したら、その概念を示す適切な名詞をつけることが必要となる。なぜなら名前(名詞)は複雑な概念を代理 representation し、簡便な操作(思考)を可能にするからだ。例えば、「人や車の交通を整理するために緑と赤のランプで進めと止まれを示す機械」というのは「信号」と言い換えられ、簡単に考えられるようになる。数学でも 5×5 というのは $5+5+5+5+5$ を言い換えたものであり、より簡単にまた、分かりやすくなっている。 Σ や \int も同じなので、数学は特にこの言いかえの傾向がよく見られる。また、representation とは re 強調 (ないし再度) と presentation 目の前に現れる、を組み合わせた言葉であり、表象するというを意味するものだ。そして、学問とはある意味で「用語の体系」である。個物を見たら一般概念が分かるので、その名前を付けられた概念を体系的に学ぶのが学問である。だから、暗記物のように原理を教えず名前だけ覚えるのは全く意味がない。理屈を理解し、しっかり名前を覚えていくことが、学問が分かるということで、本当は意味が分かったうえで名前を使わなくてはならない。名前があるからこそ簡単に考えられるが、あまり理解していない言葉もわかったふりして使えるので注意が必要だ。また、哲学用語を難しく思うのは日常生活にあまり浸透していない言葉が多いからである。

前回の授業では、感覚→悟性→理性の順で個別的なもの→それが何かわかる(概念による理解)→どうしてそうなるのかが分かる(法則による理解)をすると学んだ。そして、付言すると、枠組みとしてはアリストテレス以来あまり変わっていないが、カントは「認識論」としてアリストテレスは「存在論」として議論している。認識論とはいかにして正しい知識を得るのかという知識についての議論である。また存在論の存在とは、存在しているという日本語の存在と、Be 動詞的な~だという意味も含む。存在論は ontology という。

古代ギリシャにおいてロゴスとは説得や論証の手段であったがヌースとは理解し、理解に基づいて何かを生み出す力であった。ソフィストはたとえ真理=説得でなくても相手を説得できればいいという考え方だったが、それはソクラテスなどが否定した。また、パルメニデスは「一にして普遍」と唱えたが、これは確かに論理的には正しいが、現実的にはおかしい。なぜなら、この世界は変化しているからだ。そこで、デモクリトスは原子で、ア

アナクサゴラスは「万物の種子」の混合によって生成変化を説明しようとした。デモクリトスの説だと、原子と原子の間に空間ができてしまい、うまく説明できない。そのため、アナクサゴラスは液体のようなものと捉え、空間はないけれどもとけてぐちゃぐちゃではなく秩序はあるというような構造を考えた。アナクサゴラスが宇宙にヌースがあると主張し、これがヌースによって世界を理解する始まりとなった。種子は人間には認識できず、(宇宙ないし神の)「知性」が種子を認識して混合する。また、アリストテレスのロゴスとは何らかの前提を出発点として論理で前に進むことで、ヌースとは何らかの前提を把握する能力のことである。例えば、アリストテレスが作った数学の図形の5つの前提から始まって様々な証明がなされる。この前提というものは証明できず、認めるしかないものである。この前提から学問が作られていた。しかし近代になってアリストテレスの崩されることのないこの5つの前提が1つ崩された。平行線はどこまで行っても交わらないとされていたが、地球は球形なのでいつかは交わるのでは、とされた。これにより、アリストテレスの数学とは違う学問が生まれた。以上が今回の授業の要点だ。

ある概念の名前だけをただ覚えるのではなく、その意味や理屈もまとめて理解することが大切だ。高校の数学で公式の成り立ちから使い方まで細かく教えられた公式はよく覚えていて、今でも説明できるが、難しいので公式だけ頭に入れらせられたものは受験が終わってからはほとんど、覚えていない。つまり、本当に理解せず、表面的なものは頭に残らない。だから、しっかり理屈や意味まで理解して名前を覚える必要がある。

内容を概ね漏れなく取り上げています。

まずは、名詞を名詞で置き換えることの必要性についての話だった。例えば信号を例に挙げて考えてみる。日常生活の中でも「人や車の交通整理をするために緑と赤のランプで進めと止まれを示す機会」などとわざわざ言ったりはしない。むしろ信号という個物を一度見るだけでその概念を把握し、同じ概念を持っているものを同じものである、とみなすことができる。このように、概念を名詞で表すことには、複雑な概念を代理し、簡便な操作を可能にするといういい点がある。よって、ある概念に対しての代理となる名詞の存在は必要である。

また、哲学用語が難しいわけについての説明もあった。哲学用語が難しく見えてしまうのは、哲学用語自体が日常生活に浸透していないからだ、と山口先生はおっしゃった。用語を訳した人たちは言葉の意味を十分に理解した上でその意味を表現するために漢字を組み合わせて作ったので、決してあえて難しい言葉を使っているわけではない。

次に、前回の授業のまとめについての話があった。

まず始めにカントに代表される近代哲学における「理性・悟性・感性」について。人間は個物について認識する際、感覚から得た情報を悟性で統合し、悟性が統合した概念をさ

らに理性で統合する、という流れになっている。簡単に言うと、感覚によって目の前の個物を見て、それが何だかがわかり、それがどうしてそうなるのかがわかる、という意味である。具体的に言うと、ニュートンの落下の法則が挙げられる。ニュートンはまずリンゴを見た、そのリンゴが木から落ちた、ニュートンはその現象が起こっている原因を解明した、というような流れと先ほどの説明は同じである。

付言をすると、考え方の枠組みは、アリストテレス以来あまり変わっていない。しかし大きな転換点があった。それは具体的に言うと、アリストテレスは「存在論」について議論していたのに対し、カントは人間にとっての正しい理解は可能なのか、という「認識論」について議論していたという点である。

次に古代ギリシャにおけるロゴスとヌースの復習をした。ロゴスとは説得や論証の手段である。その具体例としてソフィストのレトリケーやアリストテレスの「ロギコス」の機械的に作動する演算装置が挙げられる。具体的に言うと、「Aであり、Bである。よってCである。」と言った際に、本当に「よってCである。」と言えるのかを考えるものである。

次にヌースについて。ヌースとは理解し、理解に基づいて何かを作り出す力のことである。具体例として、アナクサゴラスの「万物の秩序の原因」やアリストテレスの能動知性と受動の知性が挙げられる。

アナクサゴラスは、「万物の種子」の混合によって生成変化を説明しようとした。そこでは、「知性」が種子を認識し混合する、と考えた。つまり、人間は生まれながらに、考える力を持っているということを示している。

アリストテレスはロゴスを論証とし、何らかの前提を出発点として論理で前に向かって進める、という風に考えた。典型的な例として幾何学の公理系が挙げられる。証明できない前提・固有の前提を出発点にロジカルに研究していく、ということである。また、ヌースを何らかの前提を把握する能力と考えた。「エパゴーゲー」について、外界に対応する受動的な働きであると考え、受動的な知性と言った。アリストテレスは受動的な知性があるならば、作る知性、つまり能動知性もあるのではないか、と考えた。

また、根本的に物事を理解するということは現代を生きる私たちにとって必要なことである。なぜなら、15日の総合科学入門の時のように、憲法の根本的な意味を知ること、今の日本の深刻な状況をしっかり理解することができる、ということに繋がるからだ。よって物事を根本から理解しようとするのは大切である。

内容を概ね漏れなく取り上げています。

初めに、哲学用語について述べる。文章に訳さない、哲学用語が必要な理由は、人間は個物を見ると概念を理解するからだ。名前は、複雑な概念を代理し、簡単な操作すなわち思考を可能にする。ある概念を把握したら、その概念を示す適切な名前を付けることが必

要である。例えば、日常生活でも、信号を「人や車の交通を整理するために緑と赤のランプで進めと止まれを示す機械」などと言いつけるわけにはいかない。そのために哲学用語は必要だ。哲学用語が難しい理由は、私たちの日常生活にそれらが浸透していないからだ。訳した人たちは、言語の意味を理解したうえで、その意味を表現するための漢字を組み合わせさせて作った。哲学用語は原語で読むことが必要だ。

次に、前回の、カントに代表される近代哲学における「理性・悟性・感性」のまとめをする。感覚から得た情報を、悟性で統合し、悟性が統合した概念をさらに理性で統合する。感覚(個別的なもの)から、概念による理解(それが何だか分かる)、そして法則による理解(どうしてそうなっているのか分かる)となる。また、枠組みとしては、アリストテレス以来あまり変わっていない。大きな転換点は、カントは「認識論」として議論しており、アリストテレスは「存在論」として議論している。

最後に、今回の授業のまとめをする。パルメニデスは「一にして不変の存在」と述べたが、アナクサゴラスは、「万物の種子」の混合によって生成変化を説明しようとした。種子は人間には認識できない。宇宙ないし神の「知性」が種子を認識し混合する。アリストテレスはロゴスとヌースを以下のように述べた。ロゴスとは論証(アポデイクシス ἀπόδειξις)であり、英訳すると「a showing forth」である。「ἀπο」とは「away from, far from / after / of origin of」であり、「δ ε ἰξις」とは「to show, point out / to bring to light」である。すなわち、ロゴスとは何らかの前提を出発点として論理で前に進むことだ。プラトンのディアレクティケー(διαλεκτική)であり、英訳すると「the art of debating or arguing」である。「δι α」とは「through / during / arising from」である。また、ヌースとは何らかの前提を把握する能力である。エパゴゲー(ἐπάγωγή)とは「動詞 ἐπάγω すなわち(to bring or lead to)」「επι + ἄγω(lead)から in-duction」であり、基本的に、外界に対応する受動的なものはたつきである。「to see so as to remark or discern」とは、受動的な知性(νοῦς παθητικῶς)である。「πάσχω」とはすなわち「to suffer or be affected by anything whether good or bad to acting of oneself」である。

今回の講義も前回の授業コメントへの対応から始まった。コメントの中にはまず哲学用語が必要である理由を問うものがあった。哲学用語は一語で訳するよりも、文章で説明した方が分かりやすいが、一々その概念を示すときに文章で説明してはきりが無い。名前により複雑な概念を表象(代理)することで簡単に話す、思考する、使うことができる。また、哲学用語は敢えて難しく作られているというようなコメントもあったが、当時の訳者たちは言語の意味を理解したうえで、その意味を的確に表現するために漢字を組み合わせさせて作っていた。こうした用語を難しく感じる理由として、日常生活に浸透していないというのが挙げられる。こうした哲学とその用語を理解するためには、意味としては理解しや

すい原語、或いは日本語に至る前のものを読むことが肝要である。

次に前回の講義のまとめがあった。前回の講義ではカントによる悟性(知性)と理性の関係が示された。まず、人間は自身の感覚で得た個物の情報を、何故か概念に結び付けることができる。この能力が悟性である。さらに、この悟性により得た概念を法則に則ってどうしてそうなるのかを理解する。この能力が理性である。アリストテレスの時代以来、考え方の枠組み自体はあまり変わっていないが、アリストテレスの属性と存在自体を議論する存在論からカントのそれらにまつわる知識自体を議論する認識論へ変わったことが大きな転換点である。

最後に前々回の講義のアリストテレスのロゴスとヌースについての解説があった。アリストテレスのロゴスは何らかの前提を出発点として論理を進めるも演繹法である。弁証術やユークリッド幾何学もこれにあてはまる。対して、ヌースとは外界から得たものに対する受動的な知性であり、帰納法的に何らかの前提を把握する能力である。しかし、受動的な知性というだけでなく、**intend** などの作る、能動的な知性というような意味も持つ。

今回の講義ではヌースが受動的知性であると同時に**能動的知性**であると学んだ。受動的知性に関しては資料、先生の説明で外界にあるもの(個物)を判断して、何らかの前提(概念)を把握する能力であると理解している。しかし、能動つまり作る知性の理解ができていない。資料には英語で **to make, produce, execute/ to do** など作る、実行するというような意味の英語が並ぶ。これは能動知性が「何かを作る、すると思うこと」自体を指しているという解釈が良いのだろうか。物事を判断する受動知性、その上で何かを実行する能動知性を合わせてヌースとし、実行することを進める論理をロゴスと解釈すればよいのだろうか。

コメント [y1]: 今回、そこまで到達しませんでした。

カントに代表される近代哲学における「理性・悟性・感性」は、人間が「モノ」を認識する上のプロセスとして示された。「モノ」があることを感覚で認識し、その「モノ」が何であるかを悟性によって概念で把握し、そしてその「モノ」がどうしてそうなっているかを理性によって法則化する。この理解の統合順序が、カントによって提唱されたわけであるが、「モノ」を概念で理解することにおいて、人間の特徴が表れている。例えば、人間が初めてリンゴを見た時に、「これはリンゴである」と教えられる。この時人間は個物(見たリンゴ)を理解するのではなく、「リンゴ」そのものの概念を理解する。リンゴはリンゴであるが、見たリンゴとはまた違う個物のリンゴを見せた時、人間はこの異なる個物のリンゴを「リンゴ」と理解するのである。つまり、人間は個物を見た時に概念の方を理解するのであり、「リンゴ」というような、概念を示す適切な名前と共に理解するのである。人間はモノの概念を把握すると、その概念を示す適切な名前を付けることが必要であり、そういった概念の代理(representation)は複雑な概念**においてを用いて**簡便に思考することを可能にする。

古代ギリシアにおいてロゴスとは、説得や論証の手段として認識されてきた。プラトンは「対話」をすることで議論は進められるという「弁証術」を見出し、説得と真理は同じではないことに疑問を持った。そこに加えてアリストテレスは、ロゴスにおける論証(アポダイクシス)とは、何らかの前提を出発点として論理で前に進むことだと記した。ロゴスはギリシア語で理性、論理と訳されるが、理性を働かせるには「何らかの前提」が必要だとアリストテレスは言った、ということである。「何らかの前提」とは、証明することはできないが認めるしかない普遍的なモノであり、それらを起点とすることで初めて理性を働かせ、論理的に物事を理解し考えることができるというのである。例えば、点と点の間に線を引くと直線ができるという風に、証明のしようがない大前提があることで、新しい証明を論理的に述べるができる、ということだ。

カントの、感覚から理性への理解プロセスの基本的枠組みはアリストテレス以来あまり変わっていないことに気付く。ロゴスやヌースという言葉は近代に進むにつれ訳してきた哲学者達は、原語の意味を理解したうえでやってきた。多少の訳のズレが生じたとしても、古代ギリシアから考えられてきた理性という概念は、近代にまで継承されてきたと言える。

学生のコメントで『「哲学用語だと文章で訳すわけにもいかない』と言っていたが、その理由が分からない』というものがあつた。その答えとして単語を文章にして表すことはできるがそれをずっと使い続けることは不便だということだ。例としては信号がある。そして名前は複雑な概念を代理し、簡単な操作を可能にする。ある概念の代理を表象ということを学んだ。

さらに学生のコメントで「訳した人が、あえて難しい言葉を使っている」というものがあつた。しかし私たちが普段使っている言葉は明治以降に作られた訳が多い。哲学の用語の大部分が日常生活に浸透していないから難解に感じると学んだ。

さらにカントは個物を知ること概念も把握し自然法則による理解ができると主張した。これはアリストテレスとほぼ同じ主張である。違っているところはヌースとロゴスの順番が変わっているということとアリストテレスが存在論として議論しているのに対しカントが認識論として議論しているということだ。人間のすごいところは見えるものから見えない概念を理解することだ。

前々回のプリントに戻る。アリストテレスのロゴスは何らかの前提を出発点として論理で前に進むことであつた。その典型的な例が幾何学の公理体系である。ユークリッドの公準はこうである。「任意の点から任意の点へ直線を引くこと.有限な直線を連続的に直線に延長すること.任意の点を中心とする任意の半径の円を描くこと.すべての直角は互いに等しい.直線が2直線と交わるとき,同じ側の内角の和が2直角より小さいなら,この2直線は限りなく延長されたとき,内角の和が2直角より小さい側において交わる。」(酒井文雄、

<http://www.rimath.saitama-u.ac.jp/lab.jp/fsakai/he.html>、ユークリッドの原論、2018/6/16
アクセス)その5番目の公準をリーマンがいずれ交わるか交わらないのが複数あると考える
ようにしたことで非ユークリッド幾何学がうまれた。そして曲面上の幾何学ができるよう
になったということを学んだ。

そしてアリストテレスのヌースは何らかの前提を把握する能力である。帰納法では物事
が本当に**不変普遍**かどうか分からないが演繹法では**不変普遍**かどうか分かるということ
を学んだ。

今回の授業は、前回の授業の補足とアナクサゴラスとアリストテレスのロゴスとヌース
の考え方についてだった。

ここ数週間は哲学用語について学んでいるが、そもそも哲学用語が必要なわけは、ある
概念を把握したら、その概念を示す適切な名前を付ける必要があるからである。日常生活
でも、信号機のことを「人や車の交通を整理するために緑と赤のランプで進めと止まれを
示す機械」などと言い続けるわけにはいかない。名前は、複雑な概念を代理 **representation**
し、簡単な操作(思考)を可能にする。リンゴの絵やリンゴという文字は実在のリンゴの代わ
りにリンゴを可視化させる。私たちは、個物を見て概念を学習するが、他の言葉との体系
でその意味が決まってくるのである。学問とは、ある意味では「言葉の体系」である。ま
た、哲学用語が難しいわけは、哲学用語の大部分が日常生活に浸透していないから難解に
感じるためだといえる。訳した人たちは、言語の意味を理解したうえで、その意味を表現
するための漢字を組み合わせで作った。

前回は、カントに代表される近代哲学における「理性・悟性・感性」について学習した。
感覚から得た情報を悟性で統合し、悟性が統合した概念をさらに理性で統合する。
understanding は、感覚(個別的なもの)→概念による理解(それが何だか分かる)→法則によ
る理解(どうしてそうなっているのか分かる)。カントとアリストテレスはヌースとロゴスの
順番が逆であるが、枠組みとしてはアリストテレス以来あまり変わっていない。大きな転
換点は、カントは「認識論」として議論しており、アリストテレスは「存在論」として議
論していることである。

アナクサゴラスは、パルメニデスの「一にして不変の存在」という概念を「万物の種子」
の混合によって生成変化を説明しようとした。アナクサゴラスは、種子は人間には認識で
きないが、(宇宙ないし神の)「知性」が種子を認識し混合すると考えた。

アリストテレスはロゴスは論証であり、何らかの前提を出発点として論理で前に進むと
考えた。これは、典型的には幾何学の公理系である。また、ヌースは何らかの前提を把握
する能力であり、基本的に外界に対応する受動的な働きを持つと考えた。

哲学用語を文章で訳すわけにいかないのは、日常生活でも信号を、「人や車の交通を整理するために緑と赤のランプで示す機械」などと言い続けるわけにいかないのと同じである。ある概念を把握したら、その概念を示す名前を付けることが必要となる。名前は、複雑な概念を代理(representation)し、簡便な操作を可能にする。学問とは、ある意味では「用語の体系」である。

哲学用語を訳した人たちは、言語の意味を理解した上で、その意味を表現するための漢字を組み合わせて作ったが、そうした用語の大部分が日常生活に浸透していないため、哲学用語を難しいと感じてしまう。

カントに代表される近代哲学における「理性・悟性・感性」とは、感覚から得た情報を、悟性で統合し、悟性が統合した概念をさらに理性で統合する。感覚(個別的なもの)から概念による理解(それが何だかわかる)へ、そして法則による理解(どうしてそうなったのか)へと移り変わる。枠組みとしては、アリストテレス以来あまり変わっていないが、大きな転換点として、カントは「認識論」として議論しており、アリストテレスは「存在論」として議論していることが挙げられる。

古代ギリシアにおけるロゴスは説得や論証の手段であり、ソフィストはロゴスの技術とはレトリケーで、説得術であるとした。アリストテレスの「ロギコス」はオルガノン(道具・機械的に作動する演算装置)だとした。それは、Logic(論理学)であった。また、ヌースとは、理解し、理解に基づいて何かを作り出す力のことであった。

アリストテレスのロゴスは、何らかの前提を出発点として論理で前に進むものであり、ヌースは何らかの前提を把握する能力のことであった。

パルメニデスは「一にして不変の存在」を唱え、アナクサゴラスは「万物の種子」の混合によって生成変化を説明しようとした。

哲学用語が難解だと感じるのは、多くの用語が馴染みないものだからなのだとわかった。「理性・悟性・感性」の変遷がややこしいと思っていたが、「それがなんだかわかる」「どうしてそうなったのか」など、わかりやすく表記してくれたので、理解できた。

それはよかったです。

哲学用語が必要な理由について。

例えば、日常生活において、信号機のことを『人や車の交通を整理するために緑と赤のランプで進めと止まれを示す機械』などと言い続けるわけにはいかない。ある概念を把握したら、その概念を示す適切な名前を付けることが必要である。名前は複雑な概念を代理(representation)し、簡単な操作・思考を可能にするからだ。学問とは、ある意味では「用

語の体系」である。また、哲学用語が難しいのは、哲学用語を翻訳した人たちは言語の意味を理解したうえで、その意味を表現するための漢字を組み合わせて作ったからである。そうした用語の大部分が、日常生活に浸透していないから、難しく感じるのだ。

古代ギリシアにおけるロゴスとヌースについて。

ロゴスとは説得や論証の手段である。例としては、ソフィストという職業教師が「ロゴスの技術=レトリケー」=説得術として利用していた。説得できればよいのかと言われればそうではない。説得できる事象が真理ではないからだ。他にも、プラトンのディアレクティケー(弁証術)やアリストテレスの「ロギコス」=オルガノンがある。また、ヌースとは理解し、理解に基づいて何かを作り出す力である。アナクサゴラスの「万物の秩序の原因」やアリストテレスの能動知性と受動知性、アラビア哲学の神の知性と人間の知性、トマス・アクィナスの概念を抽象する能動知性などがある。このことから、ヌースとは主に知性や創造性を表していることがわかる。また、アリストテレスの考えるロゴスとヌースに関して、ロゴスは論証を意味し幾何学の公理系のように何らかの前提があり、そこを出発点として論理で前に進むものである。ヌースは、何らかの前提を把握する能力であり、基本的に外界に対応する受動的なはたらきを意味する。受動的な知性ともいわれる。

哲学用語を身近なものにするには言語の意味を正しく理解することが必要不可欠である。言語を正しく理解するために、まずは学習して少しずつ知識の体系を大きくする。そして徐々に哲学用語を日常生活に浸透させなければいけない。

コメント [y2]: 学術用語を日常生活にあえて浸透させる必要はありません。必要があれば浸透するでしょう。

今回の授業では、哲学用語、アナクサゴラス、アリストテレスのロゴスについて学んだ。

哲学用語の翻訳では、文章で用語の意味を説明することはできるが、いちいち文章で伝えるのは大変であり、名詞は名詞で置き換えないと不都合があるため文章で訳すわけにはいかない。また、ものの名前は複雑な概念を代理して、簡単に使えるようにしている。哲学用語は難しい言葉を使って訳されているが、もともとの言葉の意味を理解したうえで意味を表現している。

アナクサゴラスは生成変化を万物の種子の混合によって説明しようとした人物である。種子は人間には認識することができず、宇宙や神の知性が種子を認識して混合することで生成され秩序を与えたと考えられた。

アリストテレスは論証する際に何らかの前提を出発点として論理で前に進めていた。その前提は証明することはできないが認めるしかないものであり、ユークリッド幾何学などがある。私は先生が授業のなかで述べていて、5つの公準が前提としてあるということをしり、どのようなものが前提となっていて数学を習っていたのかが気になり、全部知りたくなったので調べた。「一つ目は、任意の点から任意の点へ直線を引くこと。二つ目は、有限な直線を連続的に直線に延長すること。三つ目は、任意の点を中心とする任意の半径の

円を描くこと。四つ目は、すべての直角は互いに等しい。五つ目は、直線が2直線と交わるとき、同じ側の内角の和が2直角より小さいなら、この2直線は限りなく延長されたとき、内角の和が2直角より小さい側において交わる。」¹⁾ 私はこれらを試してみたが、たしかに証明するというよりは、そう決まっただけで認めざるを得ないものであった。ただ、何でもかんでも前提となっているものが正しいと決めつけて論証してしまうと、間違っただけの結果を生み出してしまわない。

参考文献

1)「ユークリッドの**言論原論**」酒井文雄、www.rimath.saitama-u.ac.jp/lab.jp/fsakai/he.html
2018/6/19 アクセス

今回の授業では、古代ギリシアにおけるロゴスとヌースについてであった。古代ギリシアにおけるロゴスとは、説得や論証の手段であった。ソフィスト達は、ロゴスの技術は説得術であるとしていた。しかし、説得できれば良いのかといえばそうではなく、説得と真理はまた別の問題だったのである。ほかに、ギリシア語のヌースは理性・知性と日本語で訳されているが、古代ギリシアにおけるヌースとは、理解し、視界に基づいて何かを作り出す力という意味であった。そのことは、アナクサゴラスの「万物の秩序の原因」にも示されている。アナクサゴラスは、「万物の種子」の混合によって生成変化を説明しようとした。種子は人間には認識できず、宇宙ないし神の「知性」が種子を認識し混合するという考え方を持っていたのである。

次に、アリストテレスにおけるロゴスとヌースは、古代ギリシアのものとは少し異なっている。アリストテレスのロゴスは、論証を意味し、何らかの前提を出発点として論理で前に進むことを意味する。これは、典型的には幾何学の公理系である。ヌースは何らかの前提を把握する能力を指し、基本的に外界に対する受動的なはたらき、つまり受動的な知性を意味する。

このようなギリシア語の哲学用語を翻訳するのは、**一般の単語と違って文章で訳すことも不可能**なため、かなり困難である。また、ある概念を把握したら、その概念を示す適切な名前を付けることが必要となる。その名前は、複雑な概念を代理し、簡便な思考を可能にする働きがある。このことから、学問とはある意味では「用語の体系」といえるのである。

哲学用語は日常生活になじみがなく難しく、さらに翻訳されたものであるため、元の言葉の意味の一部が切り取られてしまっている。しかし、ギリシア語に含まれている意味などをしっかり理解することで、その用語の本当の意味がわかるのである。そのためにも、哲学者の考え方を原語で読む必要がある。そうすることで、少しでも哲学用語の本質が理解できるようになるのである。

コメント [y3]: そうは言っていません。一般の単語でも、毎回文章で説明するのは困難だ、と説明しました。

前回のまとめ

カントに代表される近代哲学における「理性・悟性・感性」とは感覚から得た情報を、悟性で統合し、悟性が統合した概念をさらに理性で統合するというつながりを持っている。また、感覚(個別的なもの)から概念による理解(それが何だかわかる)へ、そしてそれが法則による理解(どうしてそうなっているのかわかる)というふうにもつながっている。付言すると、これらの考え方の枠組みとしては、アリストテレス以来あまり変わっていない。しかし、大きな転換点は、カントが「認識論」として議論しており、アリストテレスは「存在論」として議論している。

哲学用語の必要性

前回「哲学用語だと文章で訳すわけにもいかない」と言っていたが、その理由がわからないという質問があった。その回答として、日常生活に置き換えたとき、信号機のことを「人や車の交通を整理するために緑と赤のランプで進めと止まれを示す機械」などと、ずっと言い続けるわけにはいかないだろう。そういった、ある概念(人や車の交通を整理するために緑と赤のランプで進めと止まれを示す機械)を把握したら、その概念を示す適切な名前(信号機)を付けることが必要になる。こうしてつけられた名前は、複雑な概念を代理 representation し、簡便な操作(思考)を可能にする。そういった意味では、学問とは、ある意味では「用語の体系」と言える。

哲学用語の難しさ

「訳した人が、あえて難しい言葉を使っている」という声が多くあったが、哲学用語を訳した人たちは、言語の意味を理解したうえで、その意味を表現するための漢字を組み合わせて作っており、そうした用語の大部分が、日常生活に浸透していないものであるがゆえに、難解に感じることもある。こうした、難しいが必要である哲学用語は前回で述べたように翻訳では意味の省略などが起こりえるので原語で読むことが必要である。

個物を見ると、人間は概念を把握できる。哲学用語は理屈から覚えるのが正しい。用語だけで覚えるのは暗記物。哲学用語をそのように覚えてはいけない。哲学用語を覚えるポイントとして、**名詞は名詞に置き換えるのがよい**。哲学用語は、意味をわかった上で使うべきだ。

カントは、感覚から得た情報を悟性で統合し、悟性が結合した概念を理性でさらに統合する原理があると考えた。

アナコサグラスは、「万物の種子」の結合によって生成変化を説明しようとした。ここで

コメント [y4]: なぜですか?というか、「名詞を名詞に置きかえる」とはどういう意味ですか?

いう種子とは、人間には認識できないもののことである。細かく言えば、ものにはそれぞれ輪郭があり、やはり秩序がある。ぐちゃぐちゃの混合物ではない。知性(ヌース)があつて、それぞれの原料を認識し、調合するものだという考え方である。このようにアナクサゴラスはヌースによって世界を説明した。

アリストテレスは「ロゴス」を論証(アポデイクシス)と置き換えた。これは、何らかの前提を出発点として論理で前に進むということだ。これは、典型的には幾何学の公理系である。幾何学で非常に有名なものは、「ユークリッドの幾何学」である。点と点の間の直線を線でつなげること、直線はそのまま有限に延長できる、ある点に対してある半径の円を1つ書くことができる、直角は全て等しい、一つの直線が二本の直線と交わり、同じ側の二つの直角よりも小さいならば、この二直線を延長すると、この二つの直角よりも小さい角のある側で交わる、という5つ側で定められており、これらを5つの公準という。

五つ目の公準は平行線の定義とも言われている。しかし、五つ目の定義は、数々の人に否定され、「非ユークリッド幾何学」ができた。

それに対して前の4つの定義は直観(intuition)であり、とてもシンプルで証明が不可能なので前提として受け入れるしかないのだ。これらを出発点として数々の証明が始まる。まさに、「ロゴス」という言葉の定義とつながる。

コメント [y5]: 5つ目も、直観で受け取るしかない。

哲学用語が必要である理由。それは、ある概念を把握したら、それを示す適切な名前をつけることで複雑な概念を代理し、簡便な操作(思考)を可能にするためである。

しかし、その哲学用語は難しいと感じる。その理由としては、そうした用語の大部分は日常生活にあまり浸透しておらず、難解に感じるからである。哲学用語を翻訳した人たちは、言語の意味を理解した上で、その意味を表現するための漢字を組み合わせで作ったのである。

古代ギリシアにおけるロゴスとヌースについて。

ロゴスとは、説得や論証の手段であり、論理演算で処理をする。対してヌースとは、理解し、理解に基づいて何かを作り出す力のことである。アナクサゴラスはこれを「万物の秩序の原因」とした。

アリストテレスの考えたロゴスとヌースについて。ロゴスは論証とし、「何らかの前提を出発点として論理(証明)で前に進むこと」と考えた。典型的には、幾何学の公理系である。一方、ヌースとは何らかの前提を把握する能力とし、外界に対応する受動的な働き、即ち、「受動的な知性」と考えた。では、「知る知性」も存在するのかというと、存在しており、中世哲学では「能動知性」と呼ばれた。

カントに代表される近代哲学における「理性・悟性・感性」の関係性について。感性から得た情報を、悟性で統合し、悟性が統合した概念をさらに理性で統合する。

感覚(個別的なもの)→概念による理解→法則による理解という「理解」の流れが生じる。

我々の生活の周りには概念に名前を付されたものがたくさん溢れている。複雑な概念を簡便な思考にすることで私たちも理解が可能になる。それが理解できることで世の中の秩序が保たれているとも言える。確かに、哲学用語は難しいが、概念に「名前」を付けることで理解を可能にした哲学者は偉大である。そして、翻訳ではカバーしきれていない概念も存在するため、原語で読むことに努めなければならない。

今回の授業は、「理解し、考える力」の第三回の授業として、前回の学生の授業コメントを取り上げながら行われた。また、前回のまとめとしてカントの認識論や、アナクサゴラスにも触れながらの授業であった。

前回、悟性と理性について、カント哲学の基本概念を理解する上で重要であるということ学んだ。古代ギリシア語におけるロゴスとヌースがどのように変化してきたか。今ある近代哲学を考えるにあたり、過去がどのようであり、今に至るまでにどのように変化してきたかというのは非常に重要な要素である。

ギリシア語・ラテン語・英語、そしてそれらの日本語訳においても、日本語で訳すと同じ言葉で表されていても、言葉がもつ本来の意味とは少し違っていたりする。それらの言葉が哲学においてどのような意味をもつ言葉なのかを考えなければならない。本来、日本にはなかった概念・言葉を表現するために、作られた言葉は我々にはあまりなじみのない言葉も多い。これらの言葉の意味を理解するためにも、大切な一文だけでも日本語訳ではなく、**言語原語**でも読むという行為が必要になってくる。同じ意味を別の言語に移そうとする翻訳は、訳されたものでたいていは理解が可能になるものの、それが哲学用語となれば、文章にして訳すことができないため、本来の言葉の意味の一部が失われている可能性も高い。

私たちの日常生活の中に浸透しておらず、難解な言葉となる哲学用語であっても、哲学から派生した自然科学などを考えるうえでその言葉を理解するということは重要なことである。日本語に訳された、一部分が切り捨てられているかもしれない言葉を覚えるだけでは、正しく理解したとは言えない。それらの用語が本来持つ言葉の意味を知ることによって初めて理解し、考える力をつけることができ、その力は近代哲学の概念を理解することだけでなく、私たちの情報化社会となっている現代を生きるにあたっても必要な能力である。

今日の授業では、理解し考える力について学習した。人間はある個物を見ると、なぜか

その個物自体ではなく概念を把握する。例としては、ある個物を見せてそれをリンゴと教える。別の似た個物を見せるとそれをリンゴと理解するということだ。そして、哲学用語を一つ一つ文章で訳して言い続けるわけにはいかないので哲学用語が必要ということである。ある概念を把握すると、その概念を示す適切な名前が必要である。名詞は名詞に置き換えていくことが作業の意味で必要としている。それから、アナクサゴラスとアリストテレスについて学習した。

アナクサゴラスの時代の哲学者たちは、「世界はどうして変化していくのか」を考えていた。その中で、アナクサゴラスは「万物の種子」の混合のよって生成変化を説明しようとした。アナクサゴラスは、種子の中で原子と原子の間にはすき間がないが、複数の性質が原子と原子の間にはあるとしていた。

論理は「AだからB」、「BだからC」と進む。アリストテレスは、その「AだからB」の「だから」の部分は本当に正しいのかについて考えていた。その論理的な思考の規則をオルガノンにまとめた。アリストテレスはこのオルガノンの計算的な機械の仕組みで論理をまとめている。また、アリストテレスのロゴスは論証(アポダイクシス)であり、何らかの前提が出発点でそこから論理が進んでいくとした。典型的には幾何学の公理系である。証明出来ないが、認めざるを得ないものから始まる。そこから数学者のユークリッドは幾何学を展開するために五つの公理と五つの公準を基に出発するが、この方法で幾何学を展開していくやり方をユークリッド幾何学という。アリストテレスのヌースは何らかの前提を把握する能力である。基本的に外界に対応する受動的なはたらきで、世界があつてそこから知性が作られるという考えである。

今回の授業ではまず前回の授業へのコメントを扱った。哲学用語については文章を書く際にいちいちその意味を書くわけにはいかないため単語として示している。人間は何かを見たときにそれを個物としてではなく、抽象概念として理解する。例えばりんごを見てからそれを食べ、その後に別のりんごを見てもそれを同じりんごだと理解することができる。そして名前は文章で説明すると複雑な概念を代理 **representation** し、簡便な操作(思考)を可能にする。また哲学用語に難しいものが多いように感じられるのはそうした言葉の多くが日常生活に浸透していないからだと言える。訳された言語にはその意味に沿った漢字が使われており、学者が敢えて難しくしているわけではない。

前回のまとめは近代哲学における「理性・悟性・感覚」と理解についてだった。感覚(個別的なもの)から得た情報を悟性で統合(それが何だか分かる)し、悟性で統合した概念を理性で統合(どうしてそうなっているかが分かる)する。枠組みとしてはアリストテレス以来あまり変わっていないが、カントは「認識論」、アリストテレスは「存在論」として議論している。

アリストテレスのロゴスとヌースについても学んだ。ここでのロゴスは論証(a showing forth)を意味し、なんらかの前提を出発点として論理で前に進むことだ。またヌースは何らかの前提を把握する能力で、基本的に外界に対応する受動的なはたらき、つまり受動的な知性だ。しかし本来ヌースには to purpose、intend などの意味を含んでおり「作る知性」もあるとして中世哲学では「能動的知性」と呼ばれる。

哲学用語は把握した概念を表象させるために使われる。表象とは目の前に出現させる形を表すことである。概念に名前を付けることで簡単な操作を可能にする。哲学用語を訳した人たちは原語の意味を表現するために漢字を組み合わせで作られた。その用語の大半は日常生活に浸透していないため、難しく感じてしまう。しかし、そうした言葉があるため考えることができる。

次に前回のまとめをした。近代哲学における「理性・悟性・感性」はカントに代表される。感覚から得た情報を悟性で結合し、その結合した概念をさらに理性で統合する。ちなみにこの「情報」という概念は1950年代にできた比較的新しいものである。つまり、カントは理性とは自然法則として理解し、どうしてそうなるかが分かるものとして捉えている。

また、「ヌース」は理解し、理解に基づいて何かを作り出す力のことであり、ヌースによって言葉を説明する先駆けとなったのがアナクサゴラスである。アナクサゴラスは「万物の種子」の混合によって生成変化を説明しようとした。これは、デモクリトスの原子の間に空間があるという矛盾が生じるものではなく、空間がなく、複数の種類があるものとしていて矛盾が生じない。パルメニデスは「あるものはある」「ないものはない」という考えから「一にして不変の存在」とした。

アリストテレスにとってのロゴスとは論証であり、ヌースはそれぞれの学問にはそれぞれの前提があるということの意味する。何らかの前提を出発点として論理で前に進むロゴスは典型的には証明できないものを認めるしかない、幾何学の公理系である。

本日は、哲学用語について、古代ギリシアのロゴスとヌースについて学習した。

まず哲学用語が文章で訳されない理由は、訳した文章を言い続けるわけにはいかず、名詞にすることで簡便な操作や思考することが可能になるからである。さらに、異国の言葉の意味は分からないものだと思われがちだが、その国の子供たちが学習していることから、異国の自分たちも学習して理解することが出来る。そのため哲学用語は概念を示す適切な名前が付けられる。このとき、名前は個物ではなく概念を示す。このことを表象と言い、明治時代に多くなされた。それらが難解に感じられるのは、日常生活に浸透していないか

コメント [y6]: 授業では「1950年ごろ」と言いましたが、正確に言うと、シャノンの *The Mathematical theory of communication* の初版は1948年です。

らという理由のみである。

次に、古代ギリシアでは、ロゴスは計算道具のような説得や論証の手段で、ヌースは理解し、理解に基づいて何かを作り出す力とされた。パルメニデスのあるものはない、ないものはあるという存在論をめぐり、ソフィストとフィロソフィストの議論がなされた。アナクサゴラスは、原子ではなく、人間には認識できない種子が、空間全体を満たしているとした。また、アリストテレスはロゴスを、何らかの前提を出発点として論理で前に進むこととした。これは、典型的な幾何学の公理系である。この前提は証明不可能であり、リーマンらによって非ユークリッド幾何学がつくられた。また、ヌースはその前提を把握する能力とした。

以前、**神**は世界の運動の第一原因であると学習した。それゆえに、この証明不可能な前提は第一原因となり、神に関連していることにならないだろうか。

コメント [y7]: 神の話はまだしていませんが。

今日の講義では、前回の講義の学生の授業コメントを中心に学んだ。
哲学用語が必要なわけについて、信号機の例えを用いて説明を受けた。
信号機を信号機と呼ばず、文章で説明したとすれば、かなり不便である。
そうなれば、ある概念を把握したら、その概念を示す適切な名前をつけることが必要と
なってくる。

名前は、複雑な概念を代理し、簡便な思考を可能にする。

代理を英語で **representation** というのは哲学では**表象**するとも訳される。

また、哲学用語が難しいわけについては、訳した人が言語の意味を理解した上で、その意味を表現するための漢字を組み合わせで作ったからである。
その組み合わせられてきた用語のほとんどが日常生活に使われていないから、難解に感じる
のである。

古代ギリシアにおけるロゴストヌースについては、ロゴスが説得や論証の手段であり、
ヌースが理解し、理解に基づいて何かを作り出すということである。
アリストテレスのロゴスとヌースについては、ロゴスは論証であり、ヌースは何らかの前提
を把握する能力である。

ロゴスは何らかの前提を出発点として、論理で前に進む。これは典型的には幾何学の公
理系である。

ヌースは基本的に、開会に対応する受動的な働きである。

この講義を聞いて、アリストテレス以外の哲学者の**ロゴス**と**ヌース**について興味を持
った。私の興味について載っている**書物**などがあれば、教えていただきたい。

コメント [y8]: どういう意味が分かりましたか？

コメント [y9]: 坂部恵『ヨーロッパ精神史入門』岩波書店などはいかが。

今回の講義は前回に引き続き近代哲学における理解の観念を取り挙げた。そして諸論を聞きつつ、古代ギリシア哲学者、特にアリストテレスが定義した「ロゴス」、「ヌース」について扱った。

近代哲学に於いて、理解するとは、「感覚から得た情報を、悟性で統合し、悟性が統合した概念をさらに理性で統合する」ということだった。これはアリストテレス以来受け継がれてきた観念と大筋で同じだが、このような変化が生じたのは、近代哲学者は理解という観念を「認識論」を基に議論している一方で、それ以前は「存在論」を基に議論していたためである。私は両者の議論の出発点を把握し、更にそれぞれの時代の知性や理性といった哲学用語の意味を理解することで、両時代の主張について正しく理解することが出来た。

次は古代ギリシアに於ける「ロゴス」、「ヌース」観の話だ。この時代の哲学者は、「ロゴス」を「説得や論証の手段」、「ヌース」を「理解し、理解に基づいて何かを作り出す力」と定義した。そうした中、アリストテレスは、「ロゴス」を「何らかの前提を出発点として論理で前に進む」こと、「ヌース」を「何らかの前提を把握する能力」と見出した。付け加えると、アリストテレスはこの「ヌース」の働きを、基本的に外界に対する受動的なものだと唱え、「エパゴゲー」、つまり受動的な知性と呼んだ。一方で、受動的な知性の反対である能動的な知性の研究は、中世哲学において行われた。

今回の講義ではロゴスとヌースについて学んだ。三週間連続で理解する力についての講義だったので、だんだんと違いが分かってきた。また、今回の講義で新たに学んだことは、アナクサゴラス、アリストテレスにおけるロゴスとヌースについて学んだ。

アナクサゴラスは「万物の種子」の混合によって生成変化を説明しようとした。これは、比率によって物質が精製できたり、変化したりするものである。このことは原子の組み合わせで世界ができているという原子説をかなり前から唱えていたことになる。しかし、物質と物質の間に空間があり、「ないものがある」ことも明らかになった。種子は人間には認識できないので、「ないものがある」という結論に至っても仕方ない。この種子をヌースとアナクサゴラスはみなしている。

アリストテレスはロゴスを論証 a **showing forth** 何らかの前提を出発点として論理で前に進むことを表している。そして、ロゴスを何らかの前提を把握する能力とみなしている。つまり、ヌースがなければ、ロゴスを手に入れることはできない。

今までの講義を振り返ってみると、すべてに共通して言えることは、ヌースがなければ、ロゴスは存在できないことである。なぜなら、ヌースは考えることを表しており、ロゴスは表現する、話すことを表している。考えることをせずに表現することは不可能である。このことは、今も昔も変わらないことをこの講義で学ぶことができた。

哲学用語は何も特殊なものでない。ある概念を把握したら、その概念を示す適切な名前を付けることが不可欠であることは自明である。名前は、複雑な概念を視覚的に想起させることができる。また、哲学用語は難解な語を多用しているように思われるが、決して訳者が傲慢だったわけではなく、確実に意味を理解し、その意味をあらわすために私たちの日常に浸透していない言葉を選ばざるを得なかったのである。

古代ギリシアにおいて、「ロゴス」は説得や論証の手段であった。ソフィスト(詭弁家)たちには、相手を言い負かすための技術として用いられていた。一方で「ヌース」は理解し、理解に基づいて何かを作り出す力である。アナクサゴラスは、無秩序なものに秩序を与えて世界を形成する力とした。また、アリストテレスは、ヌースを、我々に存在する最高の理性であると同時に、不動の動者としての神と同一視した。

アナクサゴラスは、万物は種子からできていると宣い、そこにヌースが種子を認識し、混合することで秩序ある世界が構築されたと説いた。

哲学用語では、根本の意味は同じでも、時代と哲学者によって解釈、意味づけが違うことが多いと**感じた**。時代が進むにつれて解釈も変化するので、これは当たり前のことだが、しっかり時代の変遷を理解していなければ頭の中が**ごっちゃ**になってしまいそうである。また、授業の補完として、新しく出てきた人物の論を調べておきたい所存だ。

コメント [y10]: ごっちゃにならないように、復習して頭の中を整理してください。

ここ最近の授業では、哲学用語の意味を理解するために、ギリシア語やラテン語の日本語訳・英訳から「理性」「悟性」について考えていた。はっきり言って、簡単に理解できる事柄ではなかったため、「つまらないな」と**感じていた**。しかし、今回の授業の「人間がものを理解するという事」についての話は、とても**気になった**。

人間、特に子供は物の「個物」そのものではなく、その「概念」を理解しているという。小さな子供に「リンゴ」というものを見せて「これは『リンゴ』だ。」と教え、その後、前見せたリンゴとは違うリンゴを見せると、子供は「これは『リンゴ』だ。」と理解できるのだ。人間がものを理解する方法を知ったため、ほかの動物ではどうなのか少し調べてみた。調べてみると毎日新聞に**イルカに関する記事**が見つかった。イルカは物と、それを表す文字・鳴き声をセットで記憶することができるという。この記憶の過程が人間の物事の理解の過程と似ているのだ。人間以外の動物でも高度な理解の仕方をするものがあるようだ。

哲学の話からは少し脱線してしまったが、**動物を通してでも哲学的な考え方**ができるかもしれない。

参考文献

コメント [y11]: 報道のもとに学術論文があるなら、そちらを参照した方がよいでしょう。

コメント [y12]: 後期の課題発見ゼミでは、熊坂先生が動物をつうじて哲学的な考え方をしようという授業をされますから、受講してはいかがでしょうか。

毎日新聞、「イルカ:物・文字・音声、一緒に 理解能力は人間並み」

<https://mainichi.jp/articles/20170831/k00/00e/040/277000c> 2018年6月18日 閲覧

今回の哲学の講義では、最初に学生のコメントへの回答、前回のまとめ、アリストテレスのロゴスとヌースを勉強した。

まず、「哲学用語だと文章で訳すわけにもいかない」理由が分からない、という学生のコメントに対して、「ある概念を把握したらその概念を表す名前を付けることが必要」ということだった。日常生活において、一度把握・理解した個物・概念を、複雑で長たらしく説明した「名前」を言い続けることはできない。そして、ある概念に適切な名前を付けると、思考が簡単になる。

前回から学んでいる近代哲学における感性・理性・悟性について改めてまとめておくと、感覚で個物を把握して、そこから得た情報を悟性で統合した概念を、さらに理性で統合するという過程を辿る。

次に、今回の授業ではアナクサゴラスについても少し触れた。アナクサゴラスは、「万物の種子」の混合によって物事や現象の生成変化を説明しようとした。そして、アリストテレスのロゴスについて。アリストテレスのロゴスは論証という意味だ。何らかの前提を出発点として論理で前に進むもので、典型的なものとして幾何学の公理系がある。また、この「前提」を知るにはヌースしなければならない。

授業で、「学問とは、ある意味で用語の体系である」と言っていたが、その学問を使えるようになるために、用語や理屈を正しく理解することが必要である。

今回の授業は、前回の質問やコメントへの応答と、前回の授業で出来なかった内容を回収した。

哲学用語に限らずものの名前というのはその事象の内容・概念を要約したものであり、その基本的な観念についてその都度文章にしているのは長くなり過ぎて厄介であるために作られるものである。それがこと哲学においては概念そのものが一般には受け入れがたい難解なものであるため、それを出来るだけ正しく言い表すためになじみのない言葉を使わざるを得ないのである。断じて「その方が高尚なイメージを与えられるから」「自身の知識を自慢したいから」等という幼稚なものではないのである。

「AだからB」「BだからC」「つまりAはC」というような、現代まで続く**帰納法論理学的**な思考法は、アリストテレスの「オルガノン」が発端である。そしてそれらの「ある物事には何かしらの原因がある」という考え方は無限に遡ることは不可能であり、どこか

に必ず「もう戻れない進めない地点」が存在する。それが思考の大前提であり、アリストテレスも全ての思考・知識は証明できない大前提を基盤として存在していることを明言している。

また、在るものは在り、在らぬものは在らぬとしたパルメニデスは、万物の根源を流動的なものと考えた。アナクサゴラスは原子論の説明において何もない空間の存在を認めたが、パルメニデスは流動体とすることで隙間の存在を否定した。

授業まとめ

まず、アナクサゴラスは、パルメニデスの「一にして不変の存在」という考え方に対して、「万物の種子」の混合によって生成変化を説明しようとした。アナクサゴラスは、種子は人間には認識できず、(宇宙ないし神の)「知性」が種子を認識し混合すると考えた。

次に、アリストテレスのロゴスとヌースについてである。アリストテレスはロゴスを論証で何らかの前提を出発点として論理で前に進むものとした。これは、点と点をつなぐと一本の直線しか引くことができないことを前提とすることも一つである。また、ヌースを何らかの前提を把握する能力とした。エパゴーゲーとは、帰納法のことである。これは、基本的に、外界に対応する受動的な働きを指し、受動的な知性とした。さらに、アリストテレスは、「作る知性」もあると考えた。

意見・質問

古代ギリシアにおけるヌースとは、理解し、理解に基づいて何かを作り出す力であると以前学んだ。この中で、今回学んだアリストテレスの考えるエパゴーゲーという受動的な知性とは、帰納法であるから、このヌースの力を身に着けるためには、様々なことを経験することが必要である。さらに、作る知性である能動的知性を身に着けるには、経験したことから考えることが必要だ。そうすることでヌースを身に着けることができ、様々な論理をより理解することができる。

今回の授業では、哲学用語が必要である理由、再び古代ギリシアにおけるロゴスとヌース、アリストテレスのロゴスとヌースについて学んだ。

哲学用語が必要である理由については、人は個物ではなく概念を理解するため、一度目で見てそのことが何なのか知らされ、次から説明をしなくても理解しているということだ。つまり、言葉があるからこそ表現ができるのである。

古代のロゴス、ヌースについて、ロゴスは説得や論証の手段であった。プラトンは対話を通じて話を聞くという弁証術とした。一方でアリストテレスは、オルガノン(道具・機械

的に作動する計算装置)、そして Logic(論理学)とした。ヌースについては理解し、理解に基づいて何かを作り出す力である。アナクサゴラスは知性(ヌース)があるから「秩序」があるとした。アリストテレスは能動知性と受動知性、理屈が本当にあっているのかという内容だった。

次にアリストテレスのロゴスとヌースについて、ロゴスは何らかの前提を出発点として論理で前に進むという意味であり、典型的には幾何学の公理系である。ヌースは何らかの前提を把握する能力であるとした。先ほど挙げたように古代のギリシャにおけるヌースと、アリストテレスにおけるヌースは少なくとも同じ内容ではない。それゆえ、ヌースが指す本当の意味が分からなくなった。

まず哲学用語について、名前は複雑な概念を代理=representation(=表象)し、簡単に説明することを可能にする。りんごに「りんご」と名前をつけるとそれを食べてなくなってしまっても、人間は別のりんごも「りんご」と認識できる。また「哲学用語はむずかしい」と言われることがあるが、言葉の意味を表現するための漢字を組み合わせで作られているため妥当な表現であり、用語が日常生活に浸透していないため難しく感じるだけである。

カントに代表される近代哲学では、人間が感覚(個別的なもの)から得た情報を悟性で統合(それがなにかわかる)し、悟性が統合した概念をさらに理性で統合(どうしてそうなっているのか分かる)するとされている。アリストテレスは「存在論」(=オントロジー)を議論しており、カントは「認識論」(=エピステモロジー)を議論しているという違いがある。

古代リシアにおけるロゴスとヌースについて、ロゴスは説得や論証の手段であり、ソフィストがその術を教えた Logic(論理学)の語源になっている。ヌースとは理解に基づいてなにかを作り出す力のことである。対してアリストテレスのロゴスとヌースは、ヌースにより何らかの(説明不可能、疑えない)前提を把握し、それを出発点として論理で前にすすむことがロゴスである。

今回の授業では、前回の復習とロゴスとヌースに関して学んだ。前回の復習としては哲学用語がいちいち毎回その語を使おうとするときに文章で説明するわけにはいかないために、用語が必要であると学んだ。また、哲学用語が難しく感じてしまうのは日常生活に浸透していないがために難解に感じてしまうのだということがわかった。前回やったカントに代表される近代哲学における「理性、悟性、感性」に加えて、枠組みは同じであるが、カントが「認識論」として、アリストテレスは「存在論」として議論していることがわかった。ロゴスとヌースに関しては古代ギリシアにおいてロゴスは説得や論証の手段、ヌー

スは理解し、理解に基づいて何かを作り出す力を表すということがわかった。それに対してアリストテレスのロゴスは、何らかの前提を出発点として論理で前に進むこと、ヌースは何らかの前提を把握する能力を表すということを学んだ。哲学用語に関して、訳した人が言語の意味を理解した上でその意味を表現するため、漢字を組み合わせた。そのため、哲学用語を理解するにはその用語に含まれる一つ一つの漢字の意味を理解することが重要だ。用語自体は浸透していなくても訳した人は意味を理解して漢字を組み合わせているため、漢字を一つ一つ意味をとっていくことで哲学用語の理解につながる。

授業の内容が簡潔によくまとまっています。

今回の授業ではまず哲学用語についての話があった。哲学用語が必要なのは私たちが物を表すときに名前が必要であることと同じで、「ある物の形を別のもので表すため」である。信号を名前を用いずに表そうとすると授業であったように「人や車の交通を整理するために緑と赤のランプで進めと止まれを示す機械」となる。つまり名前とは複雑な概念を代理表象し、簡便な操作や思考を可能にするものなのである。そのため外国から入ってきた哲学用語についても、ある哲学用語を知った人が外国語で表された概念を理解し、その概念を代理表象するために漢字を用いて表現したものだと言うことができる。実際に漢字で表された哲学用語を私たちが難しく感じてしまうのは、その用語が私たちの日常生活に浸透していないからであると学んだ。

つぎに、古代ギリシアにおけるロゴスとヌースについて学んだ。ロゴスは古代には様々な意味でつかわれていたが、主に説得や論証の手段として用いられていた。また、ヌースはある物事を理解し、その理解に基づいて何かを作り出す力として使われていたということも復習した。今回の授業で私は哲学用語の原語と訳語について日常生活、生活習慣の違いから微妙なニュアンスの違いが生まれているのではないだろうかという意見を持った。

コメント [y13]: これは「意見」でなく「臆測」です。

ヌースは理解し、理解に基づいて何かを作り出す力である。アナクサゴラスは、宇宙そのものにヌース(知性)があり、人間には識別できない種子が混ざり合って、生み出されると考えた。つまり、ヌースは「万物の秩序の原因」であると考えた。パルメニデスは、知性によって、あるものはある。ないものはない。という「一にして不変の存在」と説き、アナクサゴラスと同じようにヌースを知性と捉えた。

アリストテレスはロゴスを論証と捉えた。プラトンのディアレクティケー(弁証法)は対話を重視していたが、アリストテレスは論理を重視し、何らかの前提を出発点として論理で前に進むと考えた。この考え方は典型的には幾何学の公理系であり、出発点が異なると別

の幾何学が誕生する。また、アリストテレスはアナクサゴラスと違って、ヌースは何らかの前提を把握する能力だと説いた。その能力をエパゴゲーと考え、基本的に、外界に対応する受動的なはたらきをする、つまり、エパゴゲーは受動的な知性だと考えた。

アリストテレスのロゴスとヌースの考え方は、学問はそれぞれ固有の前提を持っており、そこからロジカルに構築される。固有の前提はヌースによって把握される。というものである。

古代ギリシアにおいて、ロゴスは説得や論証の手段、ヌースは理解し、理解に基づいて何かを作り出す力という意味で使われた。アナクサゴラスは、ヌースによって世界を説明すると発言した先駆者で、世界自身が神であり、宇宙は生命だと述べたということを知った。

アリストテレスが提唱したロゴスは、何らかの前提を出発点として論理で前に進むという意味であり、それは、典型的には幾何学の公理系と同じが念頭にあった。

- 1,任意の点から任意の点へ直線を引くこと.
 - 2,有限な直線を連続的に直線に延長すること.
 - 3,任意の点を中心とする任意の半径の円を描くこと.
 - 4,すべての直角は互いに等しい.
 - 5,直線が2直線と交わるとき,同じ側の内角の和が2直角より小さいなら,この2直線は限りなく延長されたとき,内角の和が2直角より小さい側において交わる。(酒井文雄、ユークリットの原論、www.rimath.saitama-u.ac.jp/lab.jp/fsakai/he.html#f1、2018年6月19日)
- このような、ユークリット幾何学の、証明できないが認めざるを得ないもののようなものであるということを知った。

今回は主な内容は学生のコメントに関する回答であった。私は学生のコメントの中で特に「哲学用語が難しいのはどうしてなのか」ということに強い興味を覚えた。学生の中には「Fあえて難しい言葉を用いることで自分を高尚な人間に見せようとしている」と書いているものがいた。しかし、山口教授はそうではないと述べている。

西洋の学問が入ってきていた当時の日本には圧倒的に西洋の概念を表すための語彙が不足していた。そのため、当時の学生は外国人の先生の話す母語で講義を受けていたという。こう考えると当時の学生のレベルが大変高いということがわかる。こうして、それらの学問を修めていった学生が社会で活躍するようになると、西洋の言葉日本語で表すことができるように翻訳に努めていった。こうして、私たちが日常的に使っている言葉の表現の幅

広さが増していったのである。

しかし、それでも哲学用語は私たちにはあまり馴染みのない言葉である。これは哲学用語が、私たちの日常生活にあまり浸透しなかったためである。

つまり、ここで私たちの言葉は日常的に使われていないものではとつきにくいものになってしまうことがわかる。

今回の講義では、日常生活の中にあるものを言い換える際には、哲学用語が必要であるということを知った。また、哲学は長期間アリストテレスの理論が主流だったが、カントの「認識論」が出てきたことにより、転換したことも学んだ。先々週の続きとしてアナクサゴラスの「万物の種子」についての考え方とアリストテレスのロゴスとヌースについても話があった。アナクサゴラスは、宇宙は何かの種子が連なってできていると考えていた。しかし、その間に存在する空間については、ないものがあるという矛盾を含んでいた。アリストテレスのロゴスは、証明不可能である何らかの前提を基に検証していくというものだ。ヌースは、帰納法を基に考えていた。

私は、アリストテレスのロゴスの中で証明する際に基となる何らかの前提は、証明不可能では証明できないと考える。その理由は、何か物事を論理的に考える際に前提となるものは、絶対正しいものでなければならないからだ。そうでなければ、後にそのことが証明されるようなことがあれば、根底から揺らぐことになる。だから、私は、前提となることは証明されたものでなければならないと考える。

ある概念を把握したら、その概念を示す適切な名前を付けることが必要である。名前は複雑な概念を代理し、簡便な操作を可能にし、学問とはある意味では「用語の体系」である。哲学用語を訳した人たちは、原語の意味を理解した上で、その意味を表現するために漢字を組み合わせで作った。そうした用語の大部分が、日常生活に浸透していないため、哲学用語は難しいとされている。

アナクサゴラスは、「万物の種子」の混合によって生成変化を説明しようとした。種子は人間には認識できず、「知性」が種子を認識し混合する。ロゴスとは論証のことで何らかの前提を出発点として論理で前に進む。ヌースは何らかの前提を把握する能力で基本的に外界に対応する受動的なはたらきで受動的な知性である。

名前は複雑な概念を代理し簡便な操作を可能にするとあるが、1つの名前で複数の意味を持つ言葉もある。こういう言葉は、例えば「生」という言葉にはいきる・うまれるなどの意味があることからわかるように完全に違うわけではない。このような複数の意味の関係

コメント [y14]: 主語は何ですか？「言葉は」が主語だとすると、「言葉は違うわけではない」となり、意味が不明です。

性を考えられる点で、1つの名前でも複数の意味を持つ言葉は有効である。

コメント [y15]: 多義的な言葉は誤解のもとになるので、(とくに学問的な議論においては) どういう意味で使っているのかを特定しながら使う必要があります。

今回の授業も前回の授業の話の続きであった。

まず、哲学用語が必要なわけという話題で、ある概念を把握したらその概念を示す適切な名前を付けることが必要である。そのためにも複雑な概念を代理し、簡便な操作(思考)を可能にするのが名前であるという事が分かった。

次に前回のまとめとして、カントに代表される近代哲学における「理性・悟性・完成」について、感覚から得た情報を、悟性で統合し、悟性が統合した概念をさらに理性で統合する。端的に言うと、感覚(個別的なもの)→概念による理解(それがなんだかわかる)→法則による理解(どうしてそうなっているかわかる)という段階構成で理解が進んでいくというのが分かった。付け加えて、枠組みはアリストテレス以来あまり変わっていないが、大きな転換点はカントが「認識論」として議論しており、アリストテレスは「存在論」として議論しているという所である事が分かった。

次に、アリストテレスのロゴスとヌースという話で、ロゴスは何らかの前提を出発点として論理で前に進む、典型的には幾何学の公理系のようなものであるという事が分かった。

今回の講義では、主に哲学用語についてであった。前回、哲学用語を文章で訳すことも大事なのではないかと質問したが、文章で記したものを概念化し、思考を簡単にするために1つの名前をつけるという事を聞き納得できた。また、哲学用語が難しいわけは、私達の日常生活に浸透していないだけで、哲学用語を表現する適切な漢字が使用されている。

また、以前の講義の続きについても講義があった。アリストテレスのロゴスは、論証であり、何らかの証明不可能な前提を出発点として論理で前に進むもので、典型的には幾何学の公理系である。またヌースは、何らかの前提を把握する能力で、受動的な知性である。

今回の講義で疑問に思ったことは、哲学用語が難しいながらも必要な理由を聞いてきたのだが、なぜ難しいからといって日常生活に浸透しないのだろうか。やはり哲学は難しいと感ぜられるからだろうか。特に高校の倫理の授業では倫理用語がよく分からないままただ覚えさせられた記憶がある。難しいと感ぜられるなら、今回のように英語の翻訳から分かりやすく入っていく事が必要ではないのだろうか。

今回の講義は、哲学用語の存在意義と、なぜ難しいのか、ロゴスやヌースについての古

代の哲学者の考え方についてであった。ある概念について学んだのであれば、それを表現する名前をつけなくてはならない。名前を付けて表すことは、これからの自分の思考をさらに深めることに役立つ。哲学用語は、本来の言語の意味を理解し、それを表現するため漢字を組み合わせて作られたものである。これらの用語は、私たちの日常生活になじみがないものであるため、難しく聞こえてしまう。言語の意味が理解できないときは、そのままにしておくのではなく、原文で読んでみるなど、何か実行に移すことが大事である。

アナクサゴラスは「万物の種子」の混合によって生成変化を説明しようとした。私は、この「万物の種子」の混合という考え方に疑問を持った。種子は人間には認識できないもの、つまり、不確かなものである。認識できないのなら、それが正しいかどうかを証明できないはずだ。にもかかわらず、「万物の種子」という考えで、生成変化を説明するのは強引すぎる。

アリストテレスの「神」とは世界の運動の第一原因としての神である。形而上学第12巻第7章では「神は永遠にして最高善なる生者であり、したがって連続的で永遠的な生命と永劫が神に属する」とある。またヨーロッパ中世の哲学で取り上げられる受動的な知性の反対の能動知性は「神の知性」と考えられる。

なぜこの時代の人々は神が最高善なる存在だと信じていたのか疑問である。私の意見としては神が完全に善かどうかは分からない。もしかしたら不完全な存在であるかもしれない。だから善だと決めつけているのが根拠のないことのように見える。

アナクサゴラス(B.C.500頃~428頃)は「万物の種子」の混合によって生成変化を説明しようとした。種子とは人間には認識することができないが、宇宙または神の「知性」が種子を認識し混合する。

ロゴスの「論証」とは何らかの前提を出発点として論理で前に進む。英語では「a showing forth」となる。これはプラトンのディアレクティケーと近いものである。

今回の授業では、非ユークリッドや幾何学、アリストテレスの思想などを学んだ。授業の要点は、すべての学問には固有の前提があり、そこからロジカルに考えることが大切だということだ。また、アリストテレスは、その前提はヌースで分かり、その方法が帰納法だということ、だが帰納法は普遍でないという点において、限界があることを学んだ。

確かに、身近な学問でも前提、いわゆる基礎となるものはかならずある。その基礎がないと、学びは発展していかないし、前提が必要不可欠であることはもた言うまでもない。

しかしながら、その前提が固有のものであるという考えは間違っている。分野や方法は

コメント [y16]: ここはまだ扱っていません。

コメント [y17]: どの時代でしょうか？古代ギリシアと紀元後のキリスト教世界とは、大きな時間的隔たりがあります。

コメント [y18]: アリストテレスの論証を読んだうえで、その論点を具体的に批判しましょう。

違えども、根本にある常識や基礎はどの学問分野にも通用するものだ。最初に発見したり、その学問の創始者であっても、何も前提がない状態から、中小 (←?) を追って雪ゆき具体的に理解することなど不可能である。

したがって、学問にはそれぞれに固有のものといわれる前提が全てではなく、全部の学問に共通する前提も根本的に存在するのである。

コメント [y19]: 具体的にどのような前提なのか示してください。

1, 哲学用語が必要な理由は、ある概念を把握したらその概念を示す適当な名前をつける必要があります。 名前は複雑な概念を簡便な操作を可能にします。 人はこいつを見ると概念を把握します。 具体的なものを見てそれを抽象化して抽象なものから具体的なものを理解します。

カントに代表される近代哲学における理性と悟性と感性は、アリストテレス以来あまり変わっていないが、大きな違いはカントは認識論としておりアリストテレスは存在論としているということである。知識についての理論=エピステモロジー。またロゴスは説得や論証の手段であり、ヌースは理解し理解に基づいて何かを作り出す力である。論証→何らかの前提を出発点として論理で前にすすむがこの前提が違えば結果が変わってくる。

2, 人は言葉は違っても同じ概念を共有しているからわかりあえる。

3, 言葉が違っても翻訳ができるから。翻訳は概念は同じだけれども違う呼び方をしているものに対して呼び方を変換しているだけだから。

哲学用語は昔の人が意味を理解したうえで訳しているが、日常生活に浸透していないため難解に感じる。またいちいち文章にするわけにもいかず、一語であらわすことも理解しづらい理由の一つ。目で見えるものはいわゆる手ブレ画像だが、概念によってまとめられているため脳の視覚野の情報処理のお陰で私たちの認識知覚では綺麗に見える。 ソフィストは説得術を使うが、真理イコール説得ではない。ヌースは理解し、それに基づいて何かを作り出すちからのことである。またキリスト教社会では学校とは元々神職を学ぶところで、人々に教を説くために論理学を学ぶなど、どんどん発展していき現在のようになった。

ヌースは、理解し、それに基づいて何かを作り出すちからとあったが、何らかの前提を把握する能力ともあった。このふたつは少し違うように見えるが、どちらもヌースの意味ならなぜ 2 つに分けているのだろうか。哲学用語は難しいが、さらに混乱するので理由を知りたい。

コメント [y20]: ヌースという言葉は多義的だということです。

哲学用語は、感覚から始まり様々な意味が派生していったものとあったので、2つ意味があるのだと予想する。

アリストテレスの「神」は世界の運動の第一原因としてヨーロッパ中世の哲学で取り上げられる。能動知性は「神の知性」と考えられる。

私は今回の授業でアリストテレスの「神」について考えた。アリストテレスは宇宙論的証明により、神を位置付けた。宇宙論的証明とは神の存在の証明の一つ。自然界を証明的推論の出発点とし、自然界にみられる因果関係をたどって原因にさかのぼり、ついに最後の第一原因に達し、これを神と認める方法(宇宙論的証明とはコトバンクより)である。これにより過去にさかのぼってみると、最終的に自分は動かずに、他のものを動かす神が頂点に立つということになる。その結果、世界の始まりは神であり、究極の存在に位置付けられると私は推測した。

参考文献

<https://kotobank.jp/word/%E5%AE%87%E5%AE%99%E8%AB%96%E7%9A%84%E8%A8%BC%E6%98%8E-34859>

コトバンク・宇宙論的証明とは

コメント [y21]: 出典の記載の仕方が不十分です。

今回の講義では、前回の講義の要点である、カントに代表される近代哲学における「理性・悟性・感性」についてさらに詳しく学んだ。「理性・悟性・感性」を具体的に言うと、感覚から得た情報を、悟性で統合し、悟性が統合した概念をさらに理性で統合する、ということである。枠組みとしては、アリストテレス以来あまり変わっていないが、大きな転換点は、カントは「認識論」として議論しており、アリストテレスは「存在論」として議論しているところである。

古代ギリシアにおけるロゴスは、「説得や論証の手段」であり、ヌースは、「理解し、理解に基づいて何かを作り出す力」のことである。パルメニデスは「あるものはあり、あらぬものはあらぬ」という命題を立てたが、アナクサゴラスは「万物の種子」の混合によって生成変化を説明しようとした。

アリストテレスにおけるロゴスは、「論証」であり、何らかの前提を出発として論理で前に進む、ということの意味し、ヌースは、「何らかの前提を把握する能力」である。

今回の授業は、前回私が疑問に思った「どうしてわざわざ難しい言葉を使って自らの考えを表現するのか」について先生が回答してくださったのが印象に残った。

「日常生活に馴染みがない」というだけで、一気にそれが難解なものだと自分が思い込んでしまうという人間の特性を改めて痛感しました。

授業の内容は、前回よりはわかりやすかったものの今回も少し複雑で難しく感じました。

なぜ哲学者たちは「概念」や「理解」など抽象的で難しそうな問題にばかり挑んでいるのでしょうか。

もちろん「そういう学問だから」と答えられてしまえばそれまでなのですが、そういった事柄を理解、翻訳してなんの利点があるのだろうと考えてしまうのです。

経済学や法学といった学問と違い、哲学は発展させても私たちの生活に直接的な利益をもたらさないように思ってしまうのです。

それでも諸課題に挑み、複雑な問題に挑んでいく魅力が哲学という学問にはあるのでしょうか。哲学者たちは何に魅了されているのでしょうか。

コメント [y22]: 理論物理学も、特に利益はもたらさないでしょう。人は利益のためだけに行動するのではありません。

今回の授業では、学生のコメントに対して回答し、前回の授業の内容を続けた。哲学用語がなぜ必要であるのかという質問に答えていった。ある概念を把握したら、その概念を示す適切な名前を付けることが必要である。名前は、複雑な概念を代理し、簡便な操作や思考を可能にする。こういう訳で、哲学用語は必要である。哲学用語を訳した人たちは、言語の意味を理解したうえで、その意味を表現するために漢字を組み合わせで作った。古代ギリシアにおいて、ロゴスは説得や論証の手段であり、ヌースは理解し、理解に基づいて何かを作り出す力である。アナクサゴラスは、「万物の種子」の混合によって生成変化を説明しようとした。種子は人間には認識できず、宇宙ないし神の「知性」が種子を認識し混合すると説明した。アリストテレスの「ロゴス」は道具・機械的に作動する演算装置であり、ロゴスにかかわるものである。ロゴスは、論証であり、何らかの前提を出発点として論理で前に進み、典型的には、幾何学の公理系である。

今回の授業の中では、学生からの質問から、哲学用語について学んだ。ものの概念が分かれば見分けがつき、その概念に名前をつけることで複雑な概念を代理して簡単な思考という操作を可能にする。また、哲学用語が難しいのは、訳した人たちが作った漢字の組み合わせが普段の私たちの日常生活に浸透しておらず、難しく感じるということが分かった。さらに、古代ギリシアのロゴスとヌースについても復習した。ロゴスは説得や論証の手段で、ヌースは理解し、理解に基づいて何かを作り出す力である。その中でもアリストテレ

スのロゴスとヌースについて詳しく学んだ。ロゴスは、何らかの前提を出発点として論理で前に進み、典型的には幾何学の公理系である。

アリストテレスは理屈がないと説得できないので論理を教えた先生はおっしゃっていた。この能力は現代にも通じるものがある。総合科学入門講座で学んだ根拠づけて主張する能力はアリストテレスの考えと似ており、現代においては大切な能力の一つである。

コメント [y23]: 「論理的に考える」ときのルールを定式化した。

哲学用語は訳すのが難しい。なぜなら名詞は名詞に置き換えることが必要だからである。人は具体的な事柄を概念を示す適切な言葉に訳すため、そのままの訳をするのは難しい。また、人は物体自体は別のものなのに、概念で理解する。例えば、りんごを持っている。そのりんごを食べる。また違うりんごを持ってくると、さっきとは明らかに違う物体なのに、概念は同じだからその手に持っているものもりんごだと言う。このように、人は複雑な概念を representation し、簡単な思考を可能にしている。

哲学用語は日常生活で浸透していないため、難解に感じてしまう。

アリストテレスのロゴスは論証という意味の手段で、何らかの前提を出発点として論理で前に進む。典型的には、幾何学の公理系で、その前提である公準は、証明はできないけど認めるしかないものである。ユークリッドの 5 つ幾何学めの公準があって、前提そのものを疑ったら（無いものとしたら）別の幾何学ができた。そして、その何らかの前提を把握する能力がヌースである。

哲学用語は難しく文章で訳す際に意味がわからないという意見があった。しかし、ある概念を把握したら、それを示す適切な名前をつけなければならない。名前をつけることによって複雑な概念を代理し簡便な思考を可能にする。そのため哲学を学ぶ上で哲学用語は必要不可欠である。「訳した人が、あえて難しい言葉をつかっている」「難解な用語の方が高尚な感じがするから」「あえて難解な語を用いてがくがあることを見せつけるため」といった理由から哲学用語を難しく感じる と考える学生が多かった。しかし、訳した人たちは、言語の本来の意味を理解した上で、その意味を表現するための漢字を組み合わせつついているため、簡便な言葉を用いるだけでは、言語本来の言葉の意味をすべて表すことができない。哲学用語の大部分が日常に浸透していないため難解と感じるわけだが、私たちは哲学用語の本来の意味を理解するために簡便な表現ではなく訳した人たちが残した理解した原語の意味を学ぶべきである。

哲学用語がなければ、一回一回その概念を文章で説明しなければならなくなるので、日常生活で使う名詞と同様に、その概念に対して名前を付ける必要がある。それが哲学用語である。人間は個物を概念として理解できるので、名前を付けて認識することが可能である。しかし、名詞はあまりその概念を理解していない人でも使用できてしまうという、問題もある。

パルメニデスは非存在は存在しないという原理によって、「一にして不変の存在」を主張したが、アナクサゴラスはそれでは無理があると考え、生成変化を「万物の種子」の混合によって説明しようとした。また、この種子とは人間には認識できないものである。知性が種子を認識し混合するものとした。また、この混合には秩序があるものとした。

ロゴスとは証明できない何かの前提を出発点として論理でそれを証明しながら前に進む。ヌースとはその何らかの前提を把握する能力のことである。

今回の授業ではまず、哲学用語を訳すときに文章で訳すことは出来ない理由について学んだ。なぜならば、「信号」を説明するとき、毎回「緑と赤のランプで進めと止まれを示す機械」と言う訳にはいかないのと同様の理由である。ある概念を把握したら、その概念を示す適切な名前を付けなければならない。また、哲学用語が難しいのは、訳した人が言語のそもそもの意味を理解した上で、その意味を表現する漢字を組み合わせるが、その大部分が日常生活にあまり浸透していないからである。

次は、アリストテレスにとってのロゴスとヌースについて学んだ。ロゴスとは、何らかの前提を出発点として論理で前に進むことである。何らかの前提とは、証明できないけれど受け入れるしかないもの(ユークリッド幾何学における公準)のことである。ヌースとは、その何らかの前提を把握する力のことである。

今回、意見や質問はありません。

カントに代表される近代哲学における「理性・悟性・感性」

感覚から得た情報を、悟性で統一し、悟性が統一した概念をさらに理性で統一する。
感覚(個別的なもの)→概念による理解(それがなんだかわかる)→法則による理解(どうしてそうなのかわかる)

枠組みとしては、アリストテレス以来あまり変わっていない。大きな転換点はカントは「認識論」として議論しており、アリストテレスは「存在論」として議論している。

ロゴスは説得や論証の手段であり、何らかの前提を出発点として論理で前に進む、ヌー

スは理解し、理解に基づいて何かをつくり出す力であり、何らかの前提を把握する能力で、基本的に外界に対応する受動的な働きである。アナクサゴラスは、「万物の種子」の混合によって生成変化を説明しようとした。種子は人間には認識できない。(宇宙ないし神の)「知性」が種子を認識し混合する。

すべての知識は、何らかの前提を出発点として論理で前に進むと、~~こうなっていると~~アリストテレスは考えた。典型的な~~なには~~幾何学の公理系である。そしてその前提とは、どうしても説明することはできないが、認めるしかないものだ。ユークリッド幾何学のようなものだ。例えば、どの点からどの点へも直線を引くことができる、直線はどこまでも伸ばすことができる。点と半径が円を書くことができる、すべての直角は等しい、ある点を通り、その点を通らないある直線に平行な直線は一本しかない、などである。そして、算術には算術の前提が、物理学には物理学の前提が、それぞれあるのである。しかし限界があり、未来のことはわからない。例えば、今日知っても「きのう」法は、今年までウケなかったという事実があっても、未来のことはわからない。だから、来年はどうなるかわからないのだ。つまり、~~知識にも帰納法による知識には~~限界があるのだ。

今回の授業では、古代ギリシャにおけるロゴスとヌースと、アリストテレスのロゴスとヌースについて学んだ。古代ギリシャのロゴスは、説得や論証の手段である。つまり、言葉、論理、計算を表す。ヌースは、何かを作り出す力を表す。例えば、アナクサゴラスの「万物の秩序の原因」がある。この考えは、世界自身が神、生命でヌース(知性)が備わっているということだ。アリストテレスのロゴスは、論証を表す。それは、何らかの前提を把握し、それを出発点として、論理で前に進むということだ。このときの論理は、証明できないが認めている幾何学の公理系が典型的である。ヌースは、その何らかの前提を把握する力のことである。以上のことから、古代ギリシャのロゴスとヌース、**アリストテレスの**ロゴスとヌースは、それぞれ別の意味を持っている。出発点が変わると別の哲学が生まれるのである。

コメント [y24]: アリストテレスも古代ギリシアの人。

哲学用語が難しいというのは、私も同感だ。その理由として、ここにあるように「訳した人が、あえて難しい言葉を使っている」「難解な用語の方が高尚な感じがするから」「あえて難解な語を用いて学があることを見せつけるため」と思っていた。もっと、わかり易

くした方が理解は深まると思うし、万人にも理解できるようになるとしており、理解が大変だったが、これらの回答として、「訳した人達は、言語の意味を理解したうえで、その意味を表現するための漢字を組み合わせで作った」とあり、納得した。哲学用語にはわざと難解な言葉を使用しているのではなく、それらにはそれぞれ当てはまるような言葉の意味が含まれているのだ。

その真の意味を理解するためにも原語で読むことが大切であり、すぐ翻訳語に頼ってしまえば、本来のその語の意味を取り損ねてしまう恐れがある。

今回の授業も哲学とロゴスやヌースといった言葉について考えていく授業だった。前回はカントのような近代哲学における「理性、悟性、感性」についてだったが、今回はアリストテレスやアナクサゴラスのような哲学者が登場し、古代ギリシアにおけるロゴスとヌースの話が中心的に話された。アリストテレスのロゴスは論証であり、何らかの前提を出発点として論理で前に進むものであり、ヌースは何らかの前提を把握する能力であるということだった。

何らかの前提を把握するためのヌースがなければ、前提を把握することが出来ず、何らかの前提を出発点として論理で前に進むロゴスが機能しなくなる。またヌースが機能し前提を把握できても、それを基に論証するロゴスがなければ、前提を把握することの意味が無くなってしまう。よってロゴスとヌースは相補的な関係にある。

前回、前々回からの続きで、まず、哲学用語を文章にして訳すと不都合である理由だが、名詞は名詞に訳するのが通常であるというのが理由の一つである。毎回、長々とした説明ばかりをするわけにもいかない。それならば、短い言葉で説明できるに越したことはないのである。また、哲学用語を難しく感じる学生が多いが、それはあえて難しい言葉で訳しているのではなく、日常生活において使用することがほとんどないため、難しく感じてしまうということだろう。

私も、哲学用語が難しいのは翻訳者の意図的なものだと推測していたが、それは、自分が普段使わない言葉であるためにそう感じていただけなのである。学生のコメントと、先生のお話から、日常的に使用する言葉は簡単なもので、そうでない言葉は難解に思うというのが起こりうるということがわかった。

カントは、感覚から得た情報を悟性で統合し、悟性が統合した概念を理性で統合すると述べた。個物が概念によって理解され、その後、概念の組み合わせによって世界が見えるようになるのだ。世界とは、概念によって区分されている。

ギリシア語で「理性、論理」という意味を持つロゴスをアリストテレスは論証と訳したの手段であると考えた。アリストテレスは、全ての学問にはそれぞれ固有の前提があると考えた。また、ギリシア語で「理性、知性」の意味を持つヌースを何らかの前提を把握する能力と訳したと考えた。帰納法として、基本的には、受動的な知性のことを述べていた。しかし、自ら知ろうとする知性もあるのではないかと考え、能動知性も述べた。知性とは、何かを推論するべきかを判断する能力を含むようになってきたのは、アリストテレス以来である。

コメント [y25]: これは神の知性。

今回の授業はまず前回のコメント返しから。哲学用語が必要な理由、哲学用語が難しい理由、やはり哲学は言語原語で読むことが必要について補足と解説がなされた。次に前回の授業のまとめが入ってアナクサゴラスについての解説がされた。

哲学用語は難解なものが多いが、それは先人たちが忠実に英語などの原語の意味を理解したうえでそれを完璧に日本語に変換しようとしたからである。漢字がもともと表意文字であるから一つの文字にたくさんの意味が凝縮していることも、訳者達が相当な知識人だったこともあり、結果小難しいが含蓄のある訳語になってしまったのだ。何となく用語のせいで敬遠気味だったが、かつての知識人もできるだけ原意を損なわないように訳そうとしたのだと考えると哲学用語も少し愛着が湧いてくるものである。

今回の授業は、前回の授業コメントについての応答と補足だった。我々の日常生活の中でも、哲学用語みたいに訳しているものがある。たとえば、信号を「人や交通を整理するために緑と赤のランプで進めと止まれを示す機械」というわけにはいけないと授業で聞いた。ある程度の概念を把握することで、それにあつた名前をつけていくことが必要になってくるという事だった。また、哲学用語が難しいというコメントには、人間の日常生活に浸透していないからと答えられていた。確かに、存在論や認識論というワードはこの授業で初めて聞いた。正直、哲学用語は難しい。しかし、わからないことをそのままにしているとわからないまま。自分の知識として身に着けるには、改めて行動してみなければならぬと痛感させられた。

パルメニデスは物質を不変の存在と見て、アナクサゴラスは「万物の種子」の混合によって生成変化するといった。理性や知性と訳された「ヌース」の元の意味は目的を考えることで、理性や論理と訳された「ロゴス」の意味は言葉に関わるもの全てであるが古代ギリシアにおいてロゴスは機械的な計算機という意味で、ヌースは何か作り出す力のことをいった。アリストテレスはロゴスを論証と訳し何らかの前提を出発点として論理で前に進むことといい、ヌースは何らかの前提を把握する能力であるとかき、受動的な知性であるといった。このことから、ロゴスとヌースあるいは哲学思想は、時代背景や生活の形によって微妙な変化をし続け、現代日本では理性と知性の逆転が見られるようになった。

今回の講義では、前回の授業コメントの解説と前回の授業からの続きで、「悟性」や「理性」の言語ごとの訳や意味について考えた。

哲学用語を文章で訳す訳にはいかない理由について先生が概念には適切な名前が必要、と信号機の例で解説され、用語の大部分が日常生活に浸透していないため難解であると解説されたが、化学(→科学?)の用語のように日常生活に浸透していない用語でも現象を把握することはそんなに難しくない(と特に化学が得意でもない私は感じました)。哲学用語と化学用語の難解さの差は一体何なのだろうか。目に見えるか否かかと考えたが、化学も目に見えない現象を表すことも多く、わからなくなった。学問として、義務教育に組み込まれ、学ぶ機会の差だろうか。

ある概念を把握したら、その概念を示す適切な名前を付けることが必要である。哲学用語が難しいと感じる理由は、ある用語の大部分が、日常生活に浸透していないから。感覚から得た情報を、悟性で統合し、悟性が統合した概念をさらに理性で統合する。

正直に言って、意見や質問がない場合はどうすればいいでしょうか。時間をかけて意見などを絞り出してもいいと思います。しかし、あまり時間をかけずにふと頭に浮かんだことを綴るのがある意味本当の意見や質問なので、頑張って絞り出すよりかは意見等を書かなくてもいいのではないかな。それを書く書かないというよりは、自分の頭の中で考えるのに慣れることを意図して行なっていることなのではないでしょうか。

古代ギリシアにおけるロゴスとヌースについて、ロゴスとは説得や論証の手段であり、

コメント [y26]: そんなことはありません。それは単なる思い付きです。それをもとにして調べ、調べた内容を比較検討し、最も妥当な見解として提出するのが、「意見」です。そのようにして「自分の意見」をきちんと作っていくことをこの授業では練習しています。総合科学入門講座でも「考えるとは思いつくことではなく、調べ、比較することだ」と説明しました。『コピペと言われないレポート』にもそう書いてあるでしょう。

ヌースは理解し理解に基づいてなにかをつくりだす力のことを指す。アナクサゴラスにおいては BC.500~428 頃のものでパルメニデスが「一にして不変の存在」だと説いた。「あるものはある」「ないものはない」という前提のものである。「ある」ものは「ない」ものから生じることはない。また変化とは「ある」ものが「ない」ものになることであり、これは現実的にも論理的にも不可能である。

ロゴスとは論証であり何からの前提を「出発点として論理」で前に進む。一方、ヌースとは何らかの前提を「把握する」能力で、基本的に外界に対応する受動的なはたらきをする。

今回の授業では、ヌースとは、なんらかの前提を把握する能力であり、それはつまり帰納法である、また、ロゴスとはなんらかの前提を出発点として論理で前に進む、つまり演繹法であるということ学んだ。「帰納法とは、観察や実験によって多くの事例を集め、それらの事例を比較・検証して、そこに共通する一般的な原理や法則を発見する方法である。また、一般的な原理から論証を積み重ねることによって個々の特殊な結論を導出す思考方法を演繹法という。」(土屋徹「倫理の要点整理」2013,7)。ギリシア語のヌースとロゴスは日本語訳では、どちらも理性だが、アリストテレスの定義したこの二つの言葉は別の意味、あるいは逆の意味ともなる。

原語で読むことが必要だ。本当に実行するべき。というのは言うは易く、やるは固し難し。カントに代表される近代哲学における「理性・悟性・感性」について、感覚から得た情報を、悟性が結合した概念をさらに理性で統合する。これらは枠組み自体アリストテレス以来あまり変わっていない。カントは「認識論(epistemology)」として議論して、アリストテレスは「存在論(ontology)」として議論している。パルメニデスは「1にして不変の存在」、アナゴラスは「万物の種子」アリストテレスのロゴスは何らかの前提を出発点として論理で前に進む。ヌースは何らかの前提を把握する能力。

日本語に置き換える際に、意味を表現する語を組み合わせで作られたのが現在の哲学用語である。哲学用語が難解なのは、あえて難解な語を使ったわけではなく、日常にそうした語が浸透していないからだ。日本語に訳すと、ロゴスは理性、ヌースは知性となる。論証の手段であるロゴスと、自身の理解に依拠して創造を行うヌースは全く異なる。何らかの前提をロゴスは始まりとする。

哲学者が一般人に理解しにくく訳したわけではなく、むしろ日本語で表現されない概念を苦心して翻訳したことが分かった。哲学用語が理解できないのは我々の不勉強にあることを自覚し、理解のために励むべきである。

僕は前からこの哲学の講義に出てくる哲学用語は難しいと感じていたのですが、今回の授業にはとても共感できるものであった。なぜなら僕は以前まで「哲学者が難解な用語を使用するのは格好つけるためであり、自分の知力を知らしめるため」だと思っていたが、今回の講義で「訳した人達は、言語の意味を理解した上でその意味を表現するための漢字を組み合わせた」とあり、納得できた。哲学用語はわざと難解な語を使うのではなくそれぞれに当てはまる明確な意味が含まれている。

このことから、まずはそのまま原語で読んでみる方針の方が自分の知識レベルを向上させることが出来る。

今回の授業は哲学用語を翻訳する際に、名詞を名詞に置き換えるのは複雑な概念を単純化するためにあること。哲学用語が難解に感じる理由が普段身近に使われていないからであるから。アリストテレスのロゴスは、何らかの前提を出発して論理を進めていくことで、ヌースは何らかの前提を把握する能力であること。そして、カントに代表される感覚(感覚による理解)、悟性(概念による理解)、理性(法則による理解)の理解の工程はアリストテレスの時と枠組みが変わっていないことだった。しかしヌースとロゴスの順番がアリストテレスの時とカントの時で違っているというのも聞いた。

今回の授業では、名前は複雑な概念を代理し、簡単に思考できるようにするということがと、学問は用語の体系であるということと、カントは認識論であり、アリストテレスは存在論であるということを知りました。

私が今回の授業から考えたことは、概念が理解できない場合は、要素を自分の知っている単語に置き換えてみるということです。

なぜなら、名前は複雑な概念を簡単に思考できるように助けてくれるからです。自分の知っている概念の言葉に置き換えることによって、複雑でわかりにくい概念を自分が理解できるまで持ってくることができます。

哲学における神とは世界の運動の第一原因としての神であり、神は永遠にして最高善なる生者であり、したがって連続的で永遠的な生命と永劫が神に属するとされている。理性のヌースは本質において現実態であって、分離されうるものであり、作用を受けないもので、純粹である。

学生へのコメントの返答にも哲学の用語の大部分が、日常生活に浸透していないから、難解に感じるとありましたが、やはり哲学を本質から知るためには私たちが普段触れていないようなことにも触れて、そこから自分が今まで持ってなかった知識を吸収し、読み解いていく力が必要です。

今回の授業は前回の復習をして、アリストテレスのロゴスとヌースについて聞いた。ロゴスとは、何らかの前提を出発点として論理で前に進むということであり、ヌースは何らかの前提を把握する能力のことである。このことから、ヌースを得ていなければロゴス、つまり何らかの前提を出発点として論理で前に進むということが出来ない。アリストテレスのロゴスとヌースの意味を理解しておくことは重要であるといえる。また、実際に何らかの前提を把握して論証することで本当に正しいのか確認すべきである。

以上のことが今回の授業の要点である。

今回の内容は、前回の続きと、学生のコメントに対する応答だった。哲学用語が必要なのかというと、ある概念を把握したら、その概念を示す適切な名前を付け、複雑な概念を代理することで、思考を可能にするからだ。そのため、学問は「用語の体系」であるといえる。

我々が哲学用語を難解に感じるのは、我々の日常生活で、そうした用語の大部分が浸透していないからだ。つまり、馴れると読みやすくなるということなので、普段から哲学書を読むことが必要だ。その際、原文を読む方が著者の考えが分かりやすいので、原文で読む方が良い。

今回の講義は引き続き哲学用語に関しての内容であった。

日本語に翻訳する際、その用語を理解し、適切な名前をつける。その意味を表現する適

切な漢字を用いるが、馴染みのない漢字が用いられることもある。また、その用語は日常生活では馴染みのないものが大半である。であるから、哲学用語が難しく感じるのだ。

ロゴスは理性、ヌースは知性と訳されるが、その実はロゴスは論証の手段であり、ヌースは理解に基づいて創造する力のことである。ロゴスは何かの前提が存在し、そこを出発点として論理で前に進むのである。

ある概念を把握して、その概念を適切に表すために示した名前が哲学用語である。名前は複雑な概念を代理、つまり言い換え、簡単に思考できるようにすることを目的にしている。そのため、ある概念を把握したら、その概念を示す適切な名前を付ける必要がある。適切な名前を付けることができれば、複雑な概念でも簡単に思考に移すことができる。

アリストテレスの言う神とは世界の運動の第一原因としての神である。言い換えると、世界中の動きや出来事などの運動のきっかけをつくる神であるということである。

十分な情報を得ること、その情報から妥当な価値判断をすること、別な立場からの情報を得ることによって理性は育つ。近代哲学における理性とは、理由をつけて推論する力である。アリストテレス以来の「知性(intellect)」は何を推論するべきかを判断する能力を含んでいる。このように、近代哲学では知性と理性の逆転が起こっている。ギリシア語のヌースは、理性と訳される。しかし、ギリシア語のロゴス、ラテン語のラチオ、英語の reason も理性と訳される。このように、訳語の混乱が起こっている。

古代ギリシアにおいて、ロゴスは説得や論証の手段、ヌースは理解し理解に基づいて何かを作り出す力であった。このヌースに関して、アナクサゴラスは「万物の秩序の原因」とし、「万物の種子」の混合によって生成変化を説明しようとした。これは、種子は人間には認識できないということ、宇宙ないし神の「知性」が種子を認識し混合するということである。アリストテレスは、ロゴスは論証である、すなわち、何らかの前提を出発点として論理で前に進むとした。つまり、典型的には幾何学の公理系である。

アリストテレスの「神」とは、世界運動の第1原因としての神であり、「神は永遠にして

最高善なる生者であり、したがって連続的で永遠的な生命と永劫が神に属する」と言われている。ヨーロッパ哲学で取り上げられ、能動知性は「神の知性」と考えられる。また、アリストテレスのロゴスとは、論証のことであり、何らかの前提を出発点として論理で前に進むことを意味し、ヌースは何らかの前提を把握する能力のことであり、基本的に外界に対応する受動的なはたらきをして、受動的な知性のことを意味する。

今回の授業では、まず **representation**、概念化について学んだ。確かにリンゴや信号機など一つ一つの個々としては独立しているが、私たちはどの個体を見ても同じ言葉で表している。私はこのことについて何の疑問や意見を持ったことがなかったが、今回の授業を受けて、私たち人間は日常的に個物から概念化を図るものなのだということが **実感した**。このような自明であるように感じる根本的な人間の有り様について探求することが哲学を学ぶ第一歩になるのだろう。

哲学に関する専門用語が渋くてわかりにくい最大な理由は敢えて難しく訳したわけ **では** **ありません**。昔の人々は舶来品の哲学資料を理解して、そして漢字の中で近い意味を持つ漢字を探して、組み換えて哲学の専門用語が作られました。だから、哲学を徹底的に理解するため、原本を読むのはとても大事だと **考えられます**。

同じく考えるのは人の名前です。名前はコードと同じ、名前を取り外して人間は本来どういうものかはとても説明しにくいと **思います**。

今回の授業は哲学用語についての授業だった。哲学用語はなぜ難しいのかについての授業だった。確かに哲学用語は普段使わない言葉ばかりなので意味がわからない言葉が多い。哲学はそもそも西洋で発祥したので、哲学用語は洋語が一般的である。したがって、他の言語に訳すとなると、無理矢理訳してしまったり、誤訳になったりすることがあるので、難しくなってしまう。